

生徒支援

■語る会に向けての検討の経緯■

第1回 5月25日

○改組案の現状について確認した。

- ・教員定員 ・教員の役割 ・生徒の籍は ・軽度発達障害なのか？

○学校での特別支援教育の現状について、課題を話し合った。

- ・入試 ・校内の課題：全教員への理解周知不足 ・児童・生徒指導の質的な向上が不可欠

○特別支援教育を推進していくために

- *早急に「特別支援教育委員会（改組検討専門委）」を立ち上げて課題の解決を行っていく。
- ・幼稚園・大学の委員を含めて改組を行うように調整をしていく必要がある。

第2回 6月21日

○大学への要望・質問事項等について

- ・特別支援教育体制への移行という言葉について、具体的な中身を早急に示していただかないと、次のステップに進めない（入学面接・対象児童等）

（回答）6月中、遅くとも1学期中には示していただく話を、既に主事の先生と確認している。

○小中の主任で定例会が週に1回行われているので、継続していくことを確認。

第3回 8月29日

○現時点での、4・3・4制になった時の特別支援学級の教員のイメージについて確認。

○特別支援教育分科会のテーマについての話し合い。

- ・いくつかのテーマを検討したが、一貫教育の中での特別支援教育の方向性について、不確定な要素が多く経営にも関わることも多いのでこの団塊で決めることができなかった。

第4回 9月26日

○分科会の運営について確認した。

- ・養護教諭にも入ってもらい、生徒支援としての分科会を持つ。（名称は検討の必要がある）

○分科会の内容について話し合った。

- ・パネルディスカッション形式で、各方面からの提案を持ち寄ってはどうか。

第5回 10月11日

○幼稚園・小学校・中学校の生徒支援の状況について情報交換をした。

- ・幼稚園：管理職と養護教諭が連絡を取り合い、関係機関との連携や園内支援を行っている。
- ・小学校：心の相談や校内委員会を行って児童への支援を行っている。
- ・中学校：生徒支援委員会を設置して、生徒の「困り感」に応じた支援を模索している。

第6回 10月24日

○分科会（パネルディスカッション）の運営について話し合った。

- ・コーディネーター、シンポジスト、テーマの決定。今後のスケジュールを確認。

第7回 11月8日

○分科会（パネルディスカッション）の進め方について話し合った。

- ・コーディネーター、パネリストの打ち合わせ（提案順や概要、提案後の話し合いの視点等）

第8回 12月15日

○「一貫教育を語る会」の記録の確認と反省のまとめ

○次回以降の動き方や今後のみ投資について話し合った。

- ・生徒指導や特別支援教育の位置づけを明確にしながら、今後の生徒支援のあり方を考えていく。

■分科会の整理と総括■

1、分科会（パネルディスカッション）の概要

① 進め方やディスカッションのテーマについて説明（5分）

- パネリスト等の紹介（コーディネーター：島根大学教育学部 齋藤英明先生）
- テーマについて・ディスカッションの進め方について

② パネラーからの提案（45分）

（1）中学校における生徒の困り感と効果的な支援について

* 島根大学教育学部 附属中学校 宮崎紀雅先生

- 1 中学校の抱える問題とその生かし方
- 2 子どもの困り感とその背景
- 3 中学校でできること（生徒支援委員会）
- 4 取り組みの成果と課題

☆ 「困った子」から「困っている子」へ発想を転換してみることや、原因の追求ではなく、できることを一つ見つけてしていこうとしたことで、教員の気づきや支援が広がっていったこと等を提案。

（2）子ども同士のかかわりの中での効果的な支援について

* 府中市教育委員会 教育推進課 小川美樹先生

- 1 ピア・サポートとは
- 2 なぜ、ピア・サポートなのか
- 3 実践の概要
- 4 成果（小・中学校の実践から言えること）

☆ 計画的・系統的に府中市全体で具体的に取り組み始めている。ピア・サポートを進めることで、子どもたちの自己評価が下がってきている。今後も継続して研究をしていくこと等を提案。

（3）保護者への支援から見えてくること

* 島根大学教育学部 心理・発達臨床講座 三宅理子先生

- 1 保護者の長期的な支援の必要性
- 2 情報共有の必要性と難しさ
- 3 教育を長い目で捉えることの必要性

☆ 保護者とのかかわりから、子どもたちやその保護者を従来の教育相談的な視点だけでは支えきれなくなっている現状がある。長い目で、様々な視点から子どもと保護者を支えていける体制作りが必要であること等を提案。

③ 各パネリストの意見交換（15分）

④ フロアーからの質疑・意見交換（10分）

⑤ まとめ<コーディネーター>（5分）

2、分科会（パネルディスカッション）の報告

① 各パネラリストからの提案

○中学校における生徒の困り感と効果的な支援について（附属中学校 宮崎紀雅）

- ・中学校における生徒たちの「困り感」と効果的な支援のあり方について、どのような考え方で生徒支援を始め、広げていったのかを提案したい。
- ・全国的な動向を初めに確認したい。今までは場の教育であった（特殊学級と通常学級のどちらか）。それが、一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育に転換された。（例えて言うと、一人ひとりのサイズに合ったオーダーメイドの靴を準備する教育になったということである。
- ・本校では、平成17年度に生徒支援委員会を設置して支援を進めていった。しかし、体制を先に作るのではなく、生徒の「困り感」に応じてできることをしていったら、いつの間にか形ができていた。生徒支援を進めていく上では、このことが大切なのではないかと考えている。
- ・教員の意識が、「困った子」から「困っている子」に変わり、原因を探るのではなく次にできる一手を考えていくことが早期解決につながっている。
- ・今後の課題としては、一貫した対応をどう継続していくか、二次的な問題の予防と解決があげられる。これからもできることを少しずつ実現していきたい。

○子ども同士のかかわりの中での効果的な支援について（府中市教育委員会 小川美樹）

- ・府中市では先日、一貫教育の研究大会を行ったところである。平成16年度に市内の小中学校で試行をして、平成17年度から完全実施をした。その取り組みについて提案したい。
- ・ピア・サポートとは、ピア（仲間）によるサポート（援助）である。生徒たち自身によりよい解決方法を考えさせるかかわり方である。即時性よりも応用力を高めていくものである。
- ・なぜ、ピア・サポートかについて話したい。今、日本の社会は少子化や核家族化が進み人のかかわりは少なくなったが、情報化やグローバル化により価値観は多様になった。そこで、子どもたちに社会で生き抜くための社会性を計画的に育てる必要があると考え始めていった。
- ・平成17年度は、小学校第4学年と中学校第1学年で実施した。平成18年度からは更に広げて実施をした。（学生が進行している実施場面の様子を、VTRで紹介）
- ・（VTRの中の実施場面の説明）例えば、架空の悩みの対応策を考える。活動そのものの楽しさを味わわせながら、子どもたちの内面にアプローチして人関係の基本を学ばせていく。
- ・積極的に参加すると成果が現れやすい。調査では、子どもの精神面の健康度が向上していた。

○保護者への支援から見えてくること（心理・発達臨床講座 三宅理子）

- ・現在、スクールカウンセラーとして小学校へ行っている。また、地域の育児支援も行っている。その立場として日頃感じていることを提案したい。
- ・最近、保護者への長期的な支援が必要なケースが増えている。初めは一次的な問題であったのが、二次的な問題に移行するケースも多くある。保護者の悩みも、子どもと自分の関わりから友達関係への悩み、思春期への悩みと変化していく。
- ・発達障害なのか情緒的な問題なのかというような判断が難しく、環境が変わる節目をまたぐ相談もある。
- ・情報の共有は必要だが、守秘義務や個人情報の保護のため難しさもある。学校での情報の受け入れや活用の仕方がわからないため、保護者が十分な情報提供をされにくい面がある。
- ・長期的な課題を保護者と一緒に考え、どんな大人になってほしいか話し合い、目標を継続的に共有していくことが不可欠なのではなかろうか。

② 各パネリストの意見交換

司会 Q「特別支援教育と生徒指導の一本化のいきさつは？」

宮崎 A「生徒指導では解決しきれない問題が出てきた。教職員の中にも違和感があったが、特別支援教育のノウハウを生かし、みんなで動いて生徒の問題を解決することが有効であった。」

司会 Q「なぜ、ピア・サポートに取り組むようになったか？」

小川 A「小中学校には、規模が小さく9年間ほぼ同じメンバーで過ごす地域がある。そこでお互いの見方が固定化してしまうのを撲滅しようとしたのがきっかけである。福山大学からプログラムを紹介してもらい実施したところ成果があったので、市全体で取り組み始めた。」

司会 Q「保護者は情報を使ってほしいと思っている。うまくいった例はあるか？」

三宅 A「小・中学校で、担任・コーディネーター・スクールカウンセラー・保護者で会を持って、子どもへの支援のあり方を情報交換した。保護者に離してよかったという安心感が生まれ、対応の効果もあった。このようにもっとスムーズに対応できるとよいのでは」

司会 Q「一貫教育の一貫とは、何なのか支援のポイントや大事にしていることを聞きたい？」

宮崎 A「問題を成長するためのチャンスととらえて、子どもや保護者と一緒に乗り越えていくことが大切である。幼児期・学童期・思春期のどこかで必ず問題は起きてくる。そのサインを見逃さずに解決していくことが、11年間を見据えた支援につながると思う。」

小川 A「全市内の離れた地域でも小学校、中学校の教員同士のつながりを大事にする。また、そこで一貫した指導項目・学習規律・目標を持ち指導していくことが必要である。」

三宅 A「次の成長に向けた今があると長い目で見えていくと保護者にも伝えやすい。その上で、学校の姿勢がどの時期でも一貫していることが保護者の安心感につながるのではなからうか。」

③ フロアからの質疑・意見交換

質問 Q「小川先生に、ピア・サポートの訓練プログラムの考え方を聞きたい。また自己評価が下がるのはどういうことなのか？」

小川 A「小・中で生活調べを年に2回行っている。また、絵画による精神健康度チェックもしている。それらの調査から見えてくる課題からプログラムを検討している。自己評価が下がったのは、子どもが今までそういう見方で自分を見ていなかったためであると考えられる。」

質問 Q「情報を伝えるのは、幼・小・中の流れだけではなく逆の流れもあるのではなからうか？」

三宅 A「中学校から、幼稚園や小学校でできることはないかという働きかけもしている。受け入れ先が見えないと情報を出しにくい面もある。」

④ まとめ<コーディネーター>

①連続的な支援の必要性

・子どもと家族の関係等、一貫することで見えてくることも多くなるはずである。

②情報の管理

・幼稚園での子どもの状況を中学校でどうするかという見方もできるようになる。逆方向の流れも可能である。情報を伝えないのではなくしっかり管理して伝えていくことが有効である。

③パートナーシップの大切さ

・教員、子ども、保護者、スクールカウンセラー、大学生等様々な人と人とがつながりを持つパートナーシップが今後更に大切になるであろう。

「結論は出ないが学校や地域の実態や特性を生かしながら工夫し具体策を立てて行きたい。」